

近現代有田焼 150年の歩み



陶山神社 磁器製鳥居



本展示では、400年以上の歴史を持つ日本の伝統工芸品である「有田焼」について、経営史研究の分野から学術的内容を中心にご紹介いたします。

有田焼は、江戸時代に現在の佐賀県有田町を中心として、佐賀県・長崎県地域で生産を開始し、現在も日本を代表する伝統工芸品として、国内だけでなく世界の人達にも愛される商品として使われています。

16世紀後半に朝鮮半島から日本に来た陶工が唐津地域（現在の佐賀県唐津市）で唐津焼の生産を開始し、陶工がさらに唐津から南下して武雄・伊万里・有田地域に入り、陶器の生産だけでなく磁器の生産を開始しました。唐津では登り窯を導入して陶器の量産を行うようになり、続く有田の地で17世紀前半に磁器生産を開始しました。

佐賀藩の記録によれば、1616年に朝鮮陶工の初代李参平が有田の泉山陶石を発見し、有田磁器の量産体制を築きました。それ以降、佐賀藩は長崎貿易を通じてヨーロッパに有田焼を大量に輸出することに成功し、海外では古伊万里として広く知られる存在となりました。

江戸時代に佐賀藩の保護下で生産を開始した有田焼の発展に基づき、19世紀後半に欧米への輸出を通じて近代陶磁器業へと成長を遂げた「近現代有田焼の歩み」について本展で取り上げます。

A 有田焼の発展と佐賀藩の流通統制

(1) 有田焼の発展

古伊万里とよばれた初期の有田焼は染付の下絵を施し、花鳥風月の日本絵を有田焼の皿や壺などの磁器に描きました。次第に本格的な分業体制による生産が始まり、得意な技法を駆使して職人が有田焼を制作し、17世紀中頃に古九谷様式の色絵製品や柿右衛門様式の美術品を有田皿山で多数製作しました。

佐賀藩では徳川幕府が管理する長崎貿易を通じて盛んに取引を行いました。中国景德鎮の色絵磁器を模倣する製品が当初目立ちましたが、次第に日本のモチーフを題材にした有田焼の製品が数多くヨーロッパへ輸出されるようになりました。



柿右衛門様式
(東京富士美術館HP)

(2) 佐賀藩による統制

佐賀藩は鍋島家の献上品として「鍋島」と呼ばれる高級陶磁器の生産を行うため大川内山（現在の伊万里市）に大きな窯を築き、特注品の生産に乗り出しました。色絵による高級磁器の生産はさらに古伊万里の分野で拡大し、18世紀以降もヨーロッパやアジア各地に古伊万里が輸出されました。有田焼の原料は泉山陶石に限られ、大外山では地元の磁石に加えて肥後国（現在の熊本県）天草陶石が用いられました。

佐賀藩は大坂や江戸における流通統制を行い、有田焼を藩の専売品として取り扱いました。他にも伊万里商人が各地の廻船商人に有田焼を販売し、とりわけ紀州箕島商人が紀州徳川家を通じて江戸で有田焼を販売し、全国各地に有田焼が広く流通しました。



古伊万里 (VOC) 輸出品



初代李参平像 (泉山磁石場)

B 幕末維新期の欧米向け輸出

(1) 長崎貿易の発展

長崎貿易では、オランダ東インド会社が有田焼を買い入れてヨーロッパやアジア各地に販売する活動を展開しました。19世紀前半には欧米人による長崎来航が始まり、日米修好通商条約を締結した19世紀中頃には欧米との貿易を本格的に開始し、有田では蔵春亭や田代屋など、貿易商人による製品開発を進めて上海や香港でも貿易活動を展開しました。

明治維新を迎え、有田貿易商人は横浜に支店を設けて欧米に有田焼を次々と輸出しました。長崎に拠点を置く田代屋が横浜に拠点を移して貿易活動を展開し、さらに香蘭社や精磁会社などの近代陶磁器企業が横浜や東京に支店を設けて、欧米から来た外国商人に有田焼を販売しました。

(2) 近代陶磁器技術の導入

佐賀藩は長崎に滞在していたワグネルを有田へ呼んで、通信用碍子の生産技術を深川家や平林家などの有力窯焼に伝えたのに加え、ヨーロッパで使われていた石炭窯や石膏型の技術を有田の窯焼（窯元を経営する製造業者）に教えました。その後ワグネルは東京に移り、1873（明治6）年開催のオーストリア・ウィーン万国博への出品に関わり、東京大学・東京職工学校で陶磁器技術の指導にあたりました。

ワグネルの教えを受けた学生達は、日本の近代陶磁器業をになう技術者として卒業後全国で活躍しました。



田代紋左衛門（田代屋創業者）



幕末の有田焼（九州陶磁文化館）



田代屋ゲストハウス
（有田観光協会HP）

C 近代有田焼生産の本格化

(1) 合本組織香蘭社の設立

有田でワグネルから指導を受けた辻勝蔵と深海墨之助、そして東京や大阪での有田焼販売に乗り出した深川栄左衛門と手塚亀之助が1876（明治9）年のフィラデルフィア万国博覧会に有田焼を出品する企業として香蘭社を設立しました。手塚と深海は万博での販売を担当した起立商工会社の松尾儀助と意気投合し、アメリカ向け洋食器生産を開始しようと考えました。

1878年に香蘭社はパリ万国博覧会に参加して金牌を受賞し、ヨーロッパでの名声を高めるだけでなく、ジャポニズムとよばれる日本趣味のブームが西ヨーロッパを中心に広がりました。万博に参加した深川はリモージュの製陶機械（蒸気機関と製土機械一式）を日本に持ち帰り、通信碍子などのセラミック製品の開発にも力を入れました。香蘭社は深川家単独の事業となり、手塚・深海・辻家は新たに精磁会社を設立して欧米向けの洋食器を生産しました。



精磁会社プレート（蒲地孝典氏）



万博時代の香蘭社製品（明治中期）

(2) 有田陶磁器品評会と国内市場の発展

1889年のパリ万国博覧会、1893年のシカゴ万国博覧会などへ有田の窯焼が出品活動を続け、有田焼は美術陶磁器の海外輸出によって発展を遂げました。東京や大阪など国内主要都市でも有田焼の需要が拡大し、美術陶磁器を中心に国内での評価が高まりました。

1896年から有田陶磁器品評会を開催し（現在の有田陶器市）、1900年のパリ万国博覧会や1903年の内国勸業博覧会に多くの窯焼が有田焼の逸品を出品しました。明治期に有田焼は高級陶磁器として一般の人達に広く知られる存在となり、都市部の百貨店に有田焼の製品が数多く並ぶ時代に突入しました。



香蘭社広告ラベル
（ジャパンアーカイブズ）

D 大正・昭和期における有田焼販売

深川製磁（深川栄左衛門の次男・深川忠次が創業）の貿易部門を担当していた野田嘉四郎は家族を養うため退社し、各地の温泉旅館に有田焼を売り歩く直売商人の活動を開始しました。旅館や料亭で使われる「割烹食器」として有田焼を全国に宣伝し、上有田駅前に三兄堂本店を開業しました。野田とともに事業を展開した棕露地嘉八は満鉄と取引を行って「満州」地方での有田焼販売に力を入れました。

香蘭社は東京や大阪で百貨店のコーナー展開による販売に力を入れました。戦後はギフトとして有田焼を一般消費者に販売し、百貨店全盛の時代を迎える高度成長期にはサラリーマン層をターゲットとした家庭用食器の販売にも成功しました。

百貨店で大有田焼展を開催するなど、有田焼の知名度は一気に高まりました。1979年には大有田焼振興協同組合を結成し、百貨店での大有田焼展開催に加えて、京王プラザでの展示などを通じて有田焼のブランドを広めていきました。

ブライダルや記念品などの市場で、ホテルや百貨店の引き出物として有田焼の需要が高まりました。高級陶磁器を中心にブランド化を図った有田焼は伝統工芸品から一般家庭用食器へと主力商品をシフトしながら日本を代表する近代陶磁器として成長を遂げたのです。

三兄堂本店全景
(現丸兄商社)



京王プラザホテル
(有田・伊万里やきもの夏まつり)



有田ポーセリンパーク